

令和2年度 第3回地域福祉活動計画策定・推進評価委員会 会議録

日時：令和2年12月18日（金）18：30～20：30

会場：練馬区立区民・産業プラザ 研修室1

1. 事務局長挨拶

第5次計画の1年目であるが、新型コロナウイルス感染症の影響があり、思うように進められていない。一方でそれに対応する様々な取り組みを通じて発見がある中で社協の活動を進めている。地域福祉活動計画では、ネリーズ通信等チームに分かれて推進している。忌憚のないご意見を願いたい。

2. 新任委員への委嘱状交付

3. 配布資料確認

4. 練馬区地域福祉計画の進捗状況報告

委員長：今日は第5次計画をこれからどのように進めていくか、また思うように活動ができない1年であったが各班がどのように進めてきたのかを中心に話を進めていく。

最初に練馬区の地域福祉計画について社協に関連のある部分の説明をお願いしたい。

委員：3点に絞って説明する。1点目は生活困窮者自立相談支援事業についてである。4月に生活サポートセンターが練馬区役所へ移転し福祉保健の窓口改革の一環として区と社協が一体となって進めている。4月以降、新型コロナウイルス感染症に関する支援の相談では、社協には緊急小口資金の貸し付けや総合支援資金、住居確保給付金などの相談が殺到した。例えば、緊急小口資金は3月25日から4月8日で1600件の相談や申し込みがあり急増した。区はコロナ対策の一つとして、増加が見込まれる相談者を迅速に適切な相談につながるよう4月27日から生活相談コールセンターを設置し、区と社協が連携して運営している。年末年始も開設して相談を受けていく。生活保護に至る前に早期自立を目指し、社協の生活サポートセンターを拠点に生活困窮者支援を進める。2点目はコロナの影響で縮小もしくは休止した事業についてである。パワーアップカレッジねりまをリニューアルし、つながるカレッジねりまとして始めたところだったが、コロナの影響で9月開校となった。感染予防対策に努めながら進める。また、ねりまユニバーサルフェスは今年度は感染拡大防止の観点から事業を中止している。今後については、感染拡大の状況を見ながら実施を検討する。3点目は成年後見制度の利用推進についてである。中核機関を権利擁護センターに委託し専門職を含めた関係機関等との検討支援会議を7月から開始し、毎月実施している。社協による法人後見の実施や地域福祉権利擁護事業も進めている。区もコロナの影響で財政状況が厳しい。今は区の事業全体を見直している。効率化に努めたい。

5. 第5次地域福祉活動計画策定推進評価チームの取り組み 【資料1】

①ネリーズ通信…お手元のネリーズ通信を参考にしてほしい。ネリーズ紹介やほっこりエピソードなど紙面づくりを通してネリーズを周知していきたい。アンケートをとった際にネリーズ紹介のように人に焦点を当てると読み手に興味を持ってもらえるのではないか、などの意見をいただいた。そういったことを重視しながらチームとしてより良いものを作っていきたい。ホームページなどほかのツールとも連動していきたい。次回3月発行予定。今回の通信は来週発送予定。来年度以降は年4回くらい発行したい。ネリーズ紹介や、ほっこりエピソードなどネリーズの声を直接届けるようにしたい。委員に加わっていただくことで、職員以外の視点で新たな発見もある。

委員：新しい取り組みとして、ネリーズかるたの紹介を行う。1枚選びそれをどうして選んだのか理由を載せることになった。他の委員の皆さんにも一つずつお願いしたい。

委員：職員と委員というより、ネリーズのみなさんに加わっていただき、一緒に作っていけるとよいと思っている。

②懇談会…コロナ禍の新たな取り組みとして、Zoom等のオンラインを活用した懇談会開催を検討している。対面とオンラインのハイブリッド開催の方向で進めている。具体的には、2月17日に懇談会を開催予定。また、懇談会にむけて11月18日と12月11日に勉強会を行った。印象的だったことが、96歳の参加者がいたこと。「自分も新たな挑戦をしたい」と、個人的にも勉強されていた。今後もZoomなどで参加できるとよいとのことだった。勉強会ではZoomを通じてつながった参加者は感動している様子であった。懇談会もこのようになっていくのだと感じた。

委員：私も年が明けたら82歳になる。96歳の方が参加し、圧倒され、世の中にこういう方がいると感心した。Zoomを使って、こういう方に目を向けることも大事。大変革の時代なので、習うより慣れろなので、回数を重ねなければならない。試行錯誤だが、あらゆる角度から実行に移したほうがよいと感じた。

委員：ういんぐでの勉強会に参加。参加した方たちが意欲的で熱心でびっくりした。面白く参加した。コロナ禍で人と会えないなかで、新しいツールで人とつながることに意欲的でういんぐからココネリにつながったときはみんなで喜んだ。年代は私と近い人たちだと思うが、新しいものに取り組もうという姿勢に刺激を受けた。

③ホームページ…社協の広報委員会と協力しながら、より多くの方に地域福祉活動計画を知っていただき、ネリーズを知っていただくように進めていく。現在会議の議事録等、ペーパーベースなので、今後はホームページやフェイスブック等広報媒体の良さを生かした広報の方法を検討する。映像加工などの技術とそれをホームページにあげられるかにかかっている。委員の方にも協力していただき進めたい。これから具体的な方法を考えたい。

委員：楽しいホームページ作りをお手伝いしたい。

委員：ホームページでの情報発信は大事だが、そもそもホームページを見に行こうと思わせる過程が大事。通信など紙からホームページを見てもらうようにしたり、駅にポスターなど掲示することでホームページに誘導するなどの方法が考えられる。社協は名前が長いので、キーワードとして「ネリーズ」で検索すると検索エンジンのトップに来るような工夫ができるとよい。

④キーパーソン事例…取り組み方針としてはキーパーソンの機能についてイメージを共有し理解を広げること。事例などを通じてわかりやすい伝え方を検討する。当初は個別の人をイメージしていたが、キーパーソンの動きや機能、働きなど伝え方が変わってきた。キーパーソンの動きを分析しようと事例を作成している。事例にとらわれず機能について誰もがわかりやすく説明できるよう、言語化できるように進めている。迷いながら話し合いを重ねているところである。

委員：主にネリーズ、キーパーソン、地域福祉コーディネーターなどの名称と役割をまとめている。それぞれ、どこかで全部つながっている。表現できるけれども表現しがたいところがある。それぞれの枠組みをつけすぎること、それ以外が見えなくなってしまう。支援から取りこぼしてしまうことがないように注意しなければならない。言語化も重要だが、わかりにくいことも受容するような感受性が大事で残していきたい。こういう人と伝えつつ、それに含まれない人もいるということも同時に話ができると良い。名称にこだわりすぎず中身を大事にしたい。私たちが関わっている人と共感できる体制を作っていきたい。現場では、石神井協議体に参加した。その中の人

がネリーズやキーパーソン、地域福祉コーディネーターだった。参加して初めて理解した。そう
いった中で、最初は集まって話をすることが大事だと思った。今後も継続してブラッシュアップ
したい。

委員：私自身1988年に発掘され、現在に至る。キーパーソンについて、練馬は豊かな地域と思っている。
国から言われるずっと前から自助の活動をしてきた地域だと思っている。社協などが関わったり
委員が関わった事例など、いろいろな場面でこの人がキーパーソンなど気づいたことを持ち寄り、
抽出していくことが大事だと思った。

⑤評価…第5次計画の基準となる要素を検討し、示しながら成果をみる。取り組みとしては、11月26日に
ミーティングを行った。評価の取り組みについては、何をどう評価するか意見交換した。評価の軸を見つけ
る試行錯誤があってよいと言った意見や、第5次計画を作成した段階で予期していなかった新型コロナ感染
症拡大による影響を受け、求められる支援を考える視点も必要と意見をいただいた。評価の様式や方法に目
が行き過ぎていた部分がある。委員の皆様から意見をいただいた中で、これから基準等の話し合いをしてい
きたい。

委員：今までずっと計画は策定するだけではなく、推進する時にどう評価をするかが課題としてあがっ
ていた。評価は難しいことであるが、計画を実証するときに評価の部分にも市民が関わることが
非常に大切ではないかと思う。評価の中では、どのような形で社協活動に触れたか、物差しとし
て、長さか重さか表面積かという形で、測る道具が違うし目盛がちがうということがある。評価
を考える上で、モノや医療などは数値で分かりやすいが、社協活動や住民の地域福祉の活動は数
値で測ることは難しい。そこを社協が住民とどういうふうにタグを組んでわかりやすくするか。
全く社協がなく、存在を知らなかった人が、社協の存在を知ること自分たちの生活に関わり合
うことで学んでいく。今年はコロナなど、世界中が今まで遭遇しなかった状況で社協が頼りにさ
れて注目されている事実もある。これを出発点に、次にどのようなふうにつなげるか考えていく。目指
すべき方向性をずらさないで、どういうふうに測るか、測ることが難しいことをどう評価するか、
一つ一つ確認することが大事。試行錯誤を重ねることに意味があると考えている。

委員：先日は評価の前段階の議論をした。評価とは何かという話だった。単純に達成度というより、課
題の捉え方の話だった。コロナの影響による生活相談など、多くの人が社協に来たことである意
味、知ってもらうきっかけにはなったと思った。計画にはないことではあるが、社協を知って
もらうきっかけになっているので、新たな評価の軸や項目として考えて良いと思った。担当の話し
合い自体は、これからもっと議論が必要と感じた。

委員：3次計画、4次計画、5次計画とステップを踏んできていの中で、過去の各計画の課題を評価する
ことが大事となる。成果そのものを住民にとってどのような意味があるか言語化して形にしないと
評価が難しい。大変な班だと思う。

6. 意見交換（ネリーズとキーパーソンについて）

委員長：キーパーソンについて考え方を柔軟に、自由に発言してほしい。第5次計画の中心になるキー
パーソンについて固定した考えではなく、豊かなものにしていきたい。皆さんにとってのキー
パーソンについて話してほしい。

職員：先ほど話の中で出た石神井協議体はどういうものか説明したい。介護保険法において高齢者の方
が豊かに生活できるように生活支援コーディネーターが設置され社協が委託を受けてやっている。
地域を豊かにするには高齢者だけでなく児童など分野を超えて地域を良くしていきたいという人
を集めて協議体を作った。はじめは高齢者のための地域づくりなので高齢分野だけでいいのでは
ないかと言われていたが、多くの分野が関わることで高齢者の豊かな生活を考えることができる

ので進めている。社協のネットワークを使って集まっていただき、その会議体を通してキーパーソンとなる人がつながって進むこともある。

委員：ネリーズやキーパーソンの解釈について話をしてきた。ネリーズ通信にもネリーズとはなにか書いてあるが、ネリーズやキーパーソンはそうは意識していない。言われて気づくことが多い。自主性があるが自覚がない。わざわざそれを主張する人はいないだろう。そういった人を見つけるのが地域福祉コーディネーターであり、場が協議体や懇談会である。普段は出会う場所がないので、つながって初めてキーパーソンだったと気付きがあるので、そういった場が必要。そういった場を作るのが地域福祉コーディネーターの役割ではないか。

委員：区からコロナ禍で予定や計画の見直しがあった。例えば、利根川の河口がある。私たちは川の中を泳いできた（キーパーソンやネリーズ）が、太平洋（コロナ禍）にでてしまった。太平洋でおぼれている人（困っている人）がたくさんいる。今大事なのは定義ではなく、助けて行動すること。そのために動いている人がキーパーソンだろう。困っている人を助けることが大事。多くの活動から定義をつければよい。他の人がいうように評価は難しい。現状どうするかを第一に考える。評価は後でいいからとりあえず困っている人は助ける。キーパーソンは後からつけばよい。第5次計画という川の流れから、太平洋に出てしまっている。そう思って活動して、後から理論構成を考えればよい。

委員：現場の課題を解決するために定義づけをしようとする。大事なのは必要としている人。コロナ禍というが、子どもの貧困はずっと続いている。このような状況でも定義づけは一方では必要だと思っているが、同時に進める。何のためにやっているかという支援が必要な人のためにやっている。より多くの人に知ってもらうことも大事だと思うが、そのためにやっているわけではない。方法論にならず、何のためにやっているかを大事にしたい。

委員：組織はあってもいいが、みんなが動くにはどうした良いか。まずは動くことが今は大事。

委員：協議体はいろんな分野の方が集まってつながっている。キーパーソンやネリーズという定義づけというか、そこに来ってもらうことに意味がある。本人の自覚なくネリーズの方もいっぱいいるし、キーパーソンという言葉で定義づける、人から言われることで、ああそうかと納得することもある。どちらが先かは難しい。

委員：私は立場が違うとって終わらせるのではなく、何かしらできることがあるだろう。そういったことがないように、名称がつくことでいろいろな場面で橋渡しができるとうまい。

委員：言葉の意味というより、計画の柱としてこういう人がたくさんいるとうまいとしてきた。定義というよりは、地域の中でこういう人がキーパーソンであるという共通の考え方が必要だと思う。

職員：推進するには何か目標などがあって評価が必要。進め方の確認が必要ななので、ある程度この会議体では言語化が必要。いままでの計画の振り返りも必要。個別の人は見えやすいが、地域となると、見えない場合があるので、見ていくためにイメージを出し合うと話し合いがしやすくなる。

委員：何のために議論しているかというより、より多くの方に自分の活動を知ってもらうため、伝えるためにしている。困った人に手を差し伸べることと同時並行に整理することが必要。

委員：キーパーソンがどういうものなのか、共有は必要。

委員：皆さんがそれぞれイメージなどを出し合うことが必要。地域福祉をどう進めるかというネリーズやキーパーソンなので、AさんBさんを助ける中でその陰でCさんDさんは困っていないか思いを寄せる。地域の課題解決力を高めるためのネリーズやキーパーソンだとしたら、ネリーズは動詞として考えるとわかりやすいと思っている。ネリーズは地域の力を高めるために「ネリーズする」。キーパーソンはいくつかの芽をつないでくれるという意味で「キーパーソンする」と考えると、それぞれいっぱいあると縦と横で地域の力が高まるといいなと思う。

委員：キーパーソンについて2つの役割で考えるとわかりやすいと思った。一つは地域の困っている課

題に気付く人。もう一つは人の役に立ちたいと考えている人、地域で何かやりたいと思っている人。そういった潜在的な思いに気付くこと。実際に気付くだけでなくつなげるということなので、つながりのボランティアということかと思う。また、ある程度の発信力があって必要なところにつなげる人だと思う。

委員：気づく人・つなげる人について。仕事を始めた最初の頃に、「気づいた人が責任者だよ」と言われたことがある。キーパーソンは自覚のないのが特徴だとおっしゃっていたが、組織立てる役割の人がいる。溺れる人にロープをかけることも大事だが、多くの人が溺れていたらどうするか。一定の自覚と責任を持って取り組める人がキーパーソンになるのかと思う。なぜこういう話になるかということ、制度や法律の問題も大きい。そういう見方や視点を持っていないと、やりっぱなしの仕事になってしまう。社協がやるからには組織的な何かが必要と思う。

委員：私は一番キーパーソンに囚われている。援助技術で言うキーパーソンが頭に浮かんでしまうが、こういう囚われが伝わらないと思った。市民がキーパーソンとはどういうことか、それぞれの置かれている環境で理解できるようにすることが大事。そのためには、例え話しなど身近なことに置き換えて理解できる、理解しあえる場をつくるのが社協らしく、そうなれば良いと思った。先ほどのお話も大事。制度や法律は人を生かすためだが、最近は制度や法律に人を合わせなければならない部分がある。市民の側から制度の使い方や運用を良くしていく機運を作っていく。それが今の時代に社協が求められている役割と気づいた。

委員：地域の課題や問題をいち早く気づいて、どうしたらよいかを考えることができる人がキーパーソン。普段、地域にどんな問題があるか気づかない、見て見ぬふりをしてしまうことがあるが、キーパーソンは困っている人に声をかけることができる人。そして自分ができなければ周りの人に声をかけることができる人。そこで手伝ってくれる人がネリーズだと思う。見えない課題をキャッチできる力がある人がキーパーソンだと思っている。それぞれが協力し合ってやれば良いと思う。

委員：第5次計画の体系図を見たときにネリーズとキーパーソンの関係がよくわからないと感じていた。キーパーソンというと支援者の中で誰がキーになるかに引きずられてしまう。図になり世の中のキーパーソンとなると対象が個ではなく地域になってしまうので混乱すると感じた。ネリーズとキーパーソンを分ける必要があるのか。地域にいる人はみんなキーパーソンで、気づかない人もいるが、ネリーズの中でも関心を持っている思いの度合いが違う人なのか、気づいた人がネリーズに相談したりする関係があって地域がつながっていくなら、キーパーソンの思いを共有するのは大事だが、キーパーソンを定義づけしていくにはイメージがそれぞれ過ぎて難しいと思った。

委員：文章にどのように書いてもいいが、やるときは井戸端会議の世話焼きおばさんでいい。それがキーパーソンでもコーディネーターでもいい。困っている人が救われればよい。あとで理屈はつけられればよい。組織として助けられれば良い。誰も間違ったことは言っていない。

職員：人を見てしまうとキーパーソンもネリーズも同じになるので、なぜキーパーソンを考え出したかを改めて考えると、発信する役割が大事だと思った。その役割は大きい、何とかしなくてはならないと考え、地域に住んでいて動く人がいると思う。社協にいるコーディネーターとは違う機能と役割でキーパーソンを考えた。今考えているのは、「この人がキーパーソン」ではなく、「この時のこういう動きがキーパーソンの機能と役割を担っている」という風にしたい。今は機能としてキーパーソンをとらえていただいたらよいのではないかと考えている。キーパーソンがつくから人と思ってしまうところはある。

委員：普段、キーパーソンという言葉は、福祉サービスを受ける時の使い方をしてる。そういったイメージがあるので混乱してしまったが、キーパーソンの機能を担っている、役割を担っているということから、「それはキーパーソンの役割だね」という使い方だとスッキリする。私は人を見て、

力があると地域で活動してもらわないともったいないとか、こういうところで活かして欲しいなど、おせっかい目線が強いが、そういったことも地域のキーパーソンの役割になるのかと思う。

7. まとめ

副委員長：社協だよりでインタビューを受けてじっくりしなかったのは、あの時自分がキーパーソンとして関わったが、ほかの人にはそうではないことであった。しかし今回の話の中で自分はキーパーソンという人ではなく、たまたまその時は担ったと解釈するとすっきりすると思った。大変な中で、こういうことを話ができることが社協の良さであると思った。制度を人に合わせる世の中で、そうではないやり方を一生懸命考えるところに社協の役割があると思っている。

委員長：キーパーソンの件については、これから事例をたくさん集めていけば、なるほどというものがあると期待している。大変な時期で社協が活躍することがいいことなのかどうかかわからないが、大変な時だからこそもいえると思うが、みんなで社協の大切さを自覚しながら進めていければよい。

8. その他

【質問】

委員：社協の窓口にはたくさんの方が来ているが、相談に来ているのか。

職員：印象としては常時3人くらい相談にいらしている印象がある。一時期はエレベーターホールに並んでいた。4～6月頃は1時間くらい待っていただいていた時期もある。現在、少し落ち着いてきた。生活サポートセンターでも常時相談者がいる印象で、当初ほとんどが住居確保給付金の相談であったが、現在は仕事探しや生活費、債務、DV等様々な相談を受けている。

委員：そのような相談にネリーズの介在はあったのか。ネリーズを通じた相談はあったのか。

職員：直接相談にくる方が多く、誰かに介在されなくても相談する力のある方が多かった。それに加えて、今まで弱かった方がさらに浮き彫りになってきた。そういった方はネリーズが見つないでくれたこともある。コロナ禍だからこその、新たな活動等をする方も出てきている。

9. 次回の日程について

日時：令和3年3月1日（月）18：30～

場所：ココネリ研修室1

以上